宇奈月溫泉の印象

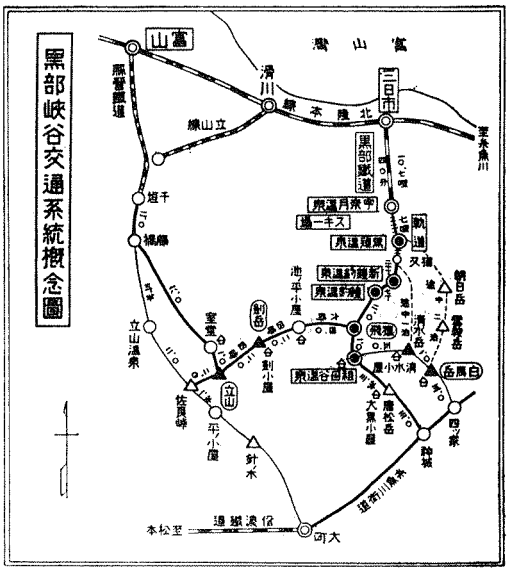
土木學會

富山縣視察團記行

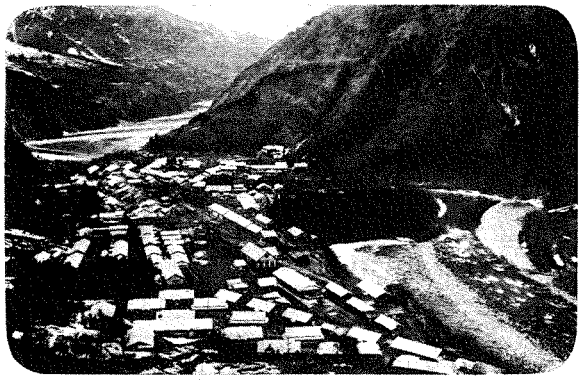
宇奈月から日本電力會社の工事用軌道に乘つて所謂その神秘境たる黑部の溪谷を上つて行く、柳河原發電所は直ぐ近くの軌道下に見え出した、左手の上には黑く塗つた大い水壓鐵管が大蛇の如くに列んでをる。

此の發電所は昨年竣工したもので最初は東洋アルミナム會社で起工し、後ち日電に合併したもの、七萬八千馬力を利用する黑部開發の第一地點である。

工事用專用軌道は實に完全な設備である、一行は例の無蓋貨車の中に長腰掛臺に毛布を敷いて座席とし、電氣機關車に曳かれて行くのであるから四方八方にらみで深山の氣を滿身にあびつゝ何とも云へぬ淸朗な氣持ちである。



(1) 黑部峽谷交通系統略圖
(1) Traffic diagram around the Kurobe Valley.

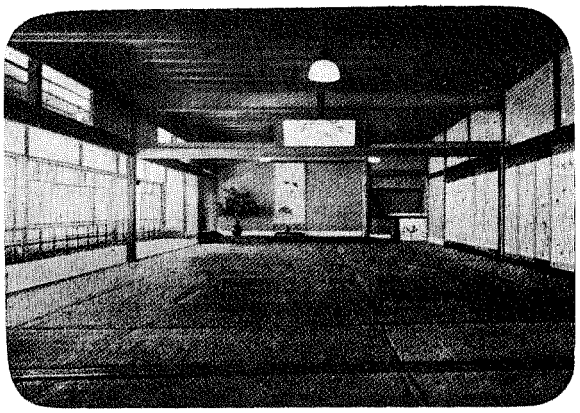


(2) 宇奈月溫泉
(2) Unadzuki hot-spring town.

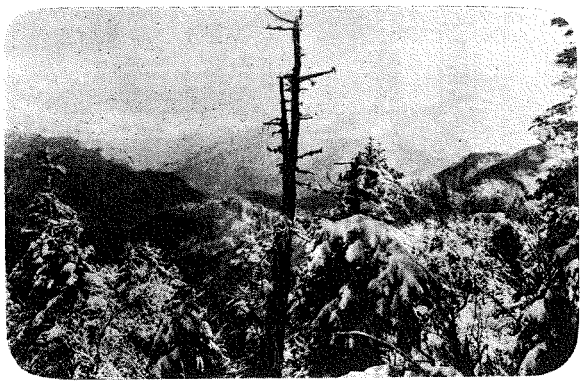
跡曳橋の上で水路橋を背景に記念の撮影をする、軌道の勾配は常に急であるが、元より危險を感ずる程の事はない、短いトンネルも澤山あり、雪崩除けの屋蓋なども鐵骨で完全に出來てをる　軌道は總て絕壁の緣を通じてをるので、車上から下を見れば黑部川の流れは急端となり、瀞みとなり、又は激流となつて白沫を飛してをる處もある谷間々々には殘雪が固着して其上に落葉や砂を被つてをるから、白い土か、白い岩石の樣にも見える。

絕壁とか斷崖とか云ふ事は黑部に來て初めて稱すべきだと思ふ、實際に直立せる斷崖は千尺もそゝり立つてをると思ふ。

猫又にて下車し、直ぐ下流の柳河原發電所の取入口を見る、ローリングゲート二ケが黑部川の水を堰留めて右岸



(3) 宇奈月溫泉延待寺旅館の大廣間
(3) A big hall of the Yentaiji Hotel in Unadzuki.



（4） 清水小屋より立山連峯を望む
（4） The Tateyama mountain and his subjects in their highest dignities.

取入口に千四百個の水を取入れて發電所に送つてをる。

一行中の多數は鐘釣温泉迄上つた。我等は既に相當の疲勞を感じたので一足先に宇奈月温泉に戻つて延待寺旅館に入つた。

宇奈月温泉の延待寺と云ふのは寺ではなくて温泉旅館兼料理屋である。然も富山ホテルよりも建物が清新にして設備も決して劣らない、浴場は即ち温泉であるから、滾々として絶え間なく溢るゝ清冽な透明な温泉に全身を没するは無上の爽快である。

温泉浴室が他のそれの如く河に臨んで、硝子張りの窓で明るいこと、室のタイル張りも都會化したものであるがそれ丈け清潔でもある。

余は早速と此の浴室に飛び込んで行つたが相浴者もなく唯一人、ザーッと溢るゝ湯にしたり、瞑目して窓外直下の黒部川の流れに耳をやつたが殆んど音なし、暫らく骨肉を緩うして黒部の自然に没した。

一浴したる宇奈月の延待寺温泉であるがむしろそれが深い印象である。

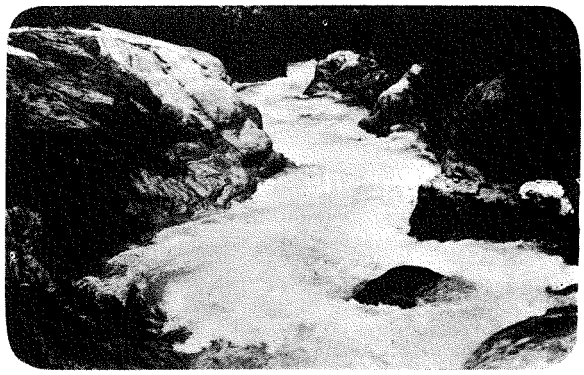
晩餐は延待寺の二階大廣間で一行百名程と日電幹部との懇親會と思つたら之も日電の御馳走らしい、富山ホテルの晩餐會に劣らぬ酒肴で、紅裙連も相變らず數十加はり、一同湯上りの浴衣掛けで打とけた宴會であつた。一同眞に歡を盡して日電當局と別盃を交した

渡邊技師其他は雨中をわざわざ宇奈月停車場迄見送つて來て土木學會の萬歳を三唱して一行と別れを告げた。

黒部西瓜は大の名物であり余の好物でもあるが、あるべき時に早く、止を得ず宇奈月せんべいなるものを土産に買込んで、黒部鐵道に乘つた。車體は立派であるがボツリボツリ雨漏りがして來る、之が話題となつて車内は又も洒落の連發で三日市驛に着いたのも知らなかつた。

三日市驛から午後十時十五分に上野行急行に乘つて各々二輛の寢臺車に納まつたが、納まらぬは車内の漫談である、やがてビールだの煎餅だのが配られると益々駄洒落が頻發する、汽車は何處を何んなに走つてゐるやら知らぬ間に五月十五日午前九時五十五分上野驛に着いた。

富山縣下の視察に對する日本電力會社及び富山縣の官民が至れり盡せりの歡待は全く會員一同の深く感謝する處であつた。尚ほ土木學會の當事者の各地に於ける打合せが行屆いた爲めに、手荷物一個に至るまで邪魔にならぬ樣に扱はれ、且つ紛失行違ひのなかつた事は何よりであつた。（岡崎生）



（5） 黒部川猿飛の奔流
（5） The Sarutobi-Rapid of the Kurobe River. In the olden time, people believed that only monkey can jump over the rapid.